



『AIマスクはいかがですか?』大賞

これからを生きぬくすべ

6年 M・Tさん

友達とけんかした。AIに相談してみた。すると、次の答えが返ってきた。謝る、話し合う、時間を置く、相手を理解する。でも私は、どれも実行しなかった。だって、私は悪くないから。事情を何度も説明したのに、わかってくれなかったのは向こうだ。言いたいことを言い放ち、私は絶交した。まちがっているかもしれない。それでも、度重なるすれちがいから、もう、自分をおさえることができなかった。それに、自分の正義を曲げてまで、続けることが本当の友情とは思えない。

この本のリナと沙和もAIマスクを手放した。やっぱりね、と思った。なぜなら絶交したはずの友達とは、今では親友だから。知らんぷりし合う時期が長かったけど、気がついたら、何でも言い合える、遠慮のいらぬ仲になっていた。こんな結果、AIには予想できなかったと思う。ひとは、全てをかなぐり捨てるときもある。それを

した、結果を受け入れる勇氣もある。そんなこともあったねと、笑い飛ばせる度胸もある。だからひとは、AIに頼る必要はないんだ。そう言い切ろうとして、私は、はたと思った。こうしたひとの強さに、気がつくきっかけをくれたのは、AIだ。AIマスクを手放したリナや沙和はもちろん、創也や夏南人だってAIから学んでいた。特に、創也のマスク。あれを私がつければ、友達を傷つけることはなかったかもしれない。自分の正義を曲げないまま、もう少し穏やかな仲直り方法が見つかったかもしれない。

ひとは自我があるから、つい、熱くなる。しかしAIは、客観的に物事を見つめられる。大方に当てるまる解決策が提示できる。ここで、私に当てるまるの、と考える力が、これからの人間には求められるのだろう。ここはいいけど、ここは足りない。パズルのように組み合わせながら、最善を目指す。それを面倒だと思ってしまうと、人間はAIにのまれてしまう。そのために、私は模索をやめない。それこそが、人間とAIが支え合う時代を生きぬくすべだ。